

## 病床から同志諸君の健闘を祈る

(昭和五十五年六月九日)

同志諸君

私は、去る五月末、突如、病いに倒れました。幸いにその後の経過は順調であります。今後の政治活動に万全を期するため、なおしばらくの加療をつづけざるをえなくなりました。このきびしい衆参両院同時選挙と闘っておられる諸君を考えると、まさに断腸の思いであります。

申すまでもなく、このたびの選挙は、わが党のみならず、わが国の命運を決するものであります。緊迫する内外の情勢下に政権を担当しうるのは、わが党をおいてほかにありません。経験も力量もなく、政策の一貫性もない野党が対処できるとは到底考えられません。万が一にも保革逆転を許し、かかる野党に政権を委ねることになるならば、われわれが国民とともに築いてきた自由と平和、繁栄と秩序は、根底から崩れ去るでありましょう。勝敗の帰趨がかつてこれほど重大だったことはありません。今日ほどわが党の責務が問われる時はないのであります。

同志諸君

選挙はもはや旬日を余すのみとなりました。

闘いは苛烈であり、諸君の労苦は察するに余りあります。しかし、「苦痛なくして勝利なし、苦患なくして栄光なし」の箴言のとおり、この試験を乗り切らなければ、われわれの明日はありません。

どうか全党一致結束し、渾身の力を振り絞って闘いぬいていただきたい。

同志諸君の健闘に思いをはせつつ、わが党の必勝を祈念してやみません。